

# あふ溢れる安芸高田愛を動画に乗せて

世界に向けて安芸高田市を動画でPR

安芸高田市のテーマソングや名所紹介の動画を、インターネットで独自に配信している、「SMILY:DRAGON(スマイリードラゴン)」さん。見ると思わず笑ってしまうような楽しい動画で、安芸高田をPRしています。

## 「大好きな安芸高田市を楽しむ・伝える」

動画は、「見てくれた人を笑わせること」と「安芸高田のPR」の2つを目的に作っています。僕は人を笑わせることと人があたたかい安芸高田市が大好きなんです。

安芸高田には楽しいところがたくさんあるし、自分が楽しいとその映像を見た人にも楽しさは伝わると思う。実際に、県外にいるファンが来てくれたこともあるし、ニューヨークから「みんな動画を見ています」と連絡がきたこともあります。

生まれ育ったこのまちに感謝しているし、恩返しをしたい気持ちもあります。まだまだやりたい企画もたくさんあるし、これからも地元を盛り上げていけるような動画を作って、世界に発信していきたいと思っています。



SMILY:DRAGON (スマイリードラゴン) さん

### 【プロフィール】

28歳。吉田町のおおはた産婦人科で産声を上げた。精神年齢は高校受験が終わって卒業を待つだけの中3の時期で止まったまま。安芸高田市の地下にある秘密基地で、いろんなさぎと戯れながら動画を作っている。子ども好きで料理が苦手。嬉しい事があると喋りになる。ついつい、ダジャレや小ネタを挟むが時々スベる。生まれ育った安芸高田市を心から愛し、心の底から応援している。鳴き声は「チュウ！」



ユーモアに満ちた動画を配信するスマイリードラゴンさん。明るく気さくな人柄も動画からにじみ出ています。左の画像は向原養魚場でヤマメの釣り堀体験をしたときのもの。

## 広報紙を見つめなおして

### 市民が輝く広報紙を目指して

毎月一回、各家庭に届く広報紙。そこには、市からのお知らせや、市内であったイベントのようすを伝える記事などが掲載されています。それに加えて巻頭に掲載される特集記事では、取材を通して一つのテーマを深く掘り下げていきます。

特集記事で取り上げるテーマは多岐にわたります。ページ数は短ければ1ページ、長ければ十数ページになることもあります。テーマは、安芸高田市が進める施策や、神楽や毛利元就関連史跡などの文化、成人式などの市をあげてのイベントなど、さまざま。それに参加する市民の方に登場していただき、生の声を載せることで、読者である市民の皆さんにも共感していただき、生の声を載せることで、読者の持つ元気を紙面から発信しています。紙面で市民が輝けば、まちが輝く。また、安芸高田市にいる人や根付く文化を深く知ることが、まちへの誇りにもつながっていきます。

近年はホームページやフェイスブックなどのSNSからの情報の入手が身近になりつつあります。しかし、紙で見える情報は誰にとっても見やすく、1つのテーマを掘り下げることで実態や表面だけでは見えてこなかった部分が見えてきます。一見、自分とは距離がありそうなまちづくりや時事について興味を持ち、考え、行動するきっかけになるのが広報紙です。

また、広報紙は小さな「嬉しい」を発信する媒体でもあります。テレビや新聞に自分たちの地域が出ることはなかなかありませんが、広報紙では比較的高い頻度で地元や知っている人がスポットライトを浴びます。地元が出てると嬉しい、知っている人が出ると嬉しい。そんな小さな「嬉しい」をこれからも広報紙は発信し続けます。



「癒しの里 菊池市のストーリーは、市民、行政、団体、企業、みんなで作ってあげていくもの。楽しい夢のあるストーリーにしていきたいですね。」



「世界一長い流しそうめん」～3328.38mのキセキ～プロジェクト。菊池市を愛する人たちが作られたYoutube動画は熱い。がんばる市民を紹介してまちを元気づけるのも広報の役割。



菊池市政策企画部市長公室広報交流係の野中英樹さん(41歳) 参考

# 広報の可能性

先進地の取り組み

他部署や市民、各種団体と協働でまちのPRに取り組む熊本県菊池市の野中英樹さん。広報紙では行政情報だけでなく、まちの魅力や課題を発信しています。広報の役割について聞きました。

Q 菊池市の広報の特徴は？

A 情報をやみくもに発信していても、まちの良さは伝わりません。「癒しの里菊池」というブランドメッセージに基づき、発信する側は効率的に、受け取る側には効果的に伝わるようにしています。観光PRや移住促進など、外に向けた「攻めの広報」と同時に、内に向けた広報に力を入れています。

Q 市民向けの広報は、なぜ必要のですか？

A 市民の郷土愛を醸成し、まちへの関心を高め、参画してもらうためです。持続可能なまちづくりを進める時、広報が果たす役割は大きく、まち全体の情報発信力の底上げにもつながります。

Q 広報の役割は？

A 「こぎやん田舎におったちゃんなんにもならん(こんな田舎にいてもなんも良いことはない)」と言う人が多いところには人は訪れません。地域にプライドを持ち、「このまちに住み続けたい」と思う人が増えることで、活気が生まれ、人を引き寄せる魅力あるまちへと変わっていきます。まちの魅力を語る人を増やすことも広報の役割です。

### 市民の方と手を携えて...

この特集を組むにあたり、私たちはまちへ飛び出しました。働いている人、買い物をしている人など10人の方々に「広報紙ってどんな気持ちで受け取られていますか？」と聞いて回ってみました。厳しいご批判を予想していましたが、意外と「編集後記読んでるよ」や「神楽の記事は見ちゃうね」とか「毎月大変だねえ...」とか、肯定的に広報紙を受け取っていた生声に出会うことができました。ただ一方では、「まあ、いつも届く物だし」「パラパラと見ると」といった声もありました。でも「広報紙なんていららない」「広報紙がなくなればいい」とは誰も話されませんでした。このまともを書きながら、自分はふと思いました。きつと広報紙って、毎月届いて当たり前。きつと広報紙って、市の情報が掲載されて当たり前。きつと広報紙って、いつも傍にあるので、その大切さに気づいてもらえない存在なのかなと...

かつての担当者は、安芸高田市が一つになればと思いを込めて広報紙を作っていたと語りました。また、ずっと住み続けたいと思えるまちづくりのために広報紙を作った担当者もいました。ある市民は広報紙からまちの元気を伝えて欲しいと話してくれました。郷土愛を動画で配信している方もいました。先進地からは、広報のあり方が変わればまちが変わるというエールをいただきました。

これからの広報紙は、これまでの想いを引き継ぎつつ、もっと市民の方から愛され、その大切さに気づいてもらえるように、独りよがりにならない「主張」を試してみようかと思えます。

そして、市が発信する広義の「広報」が「市民参画の場」になると同時に、市民の方に受け取っていただくものが、情報だけではなく「誇り」や「感動」となるよう、「これからの広報紙」は市民の方々と手を携え、「これからの広報」の先駆けとなります。これからも「広報あきたかた」をよろしくお願ひします。